



奉仕の実践

親睦から奉仕の旅路、そして真のロータリー思想

第2740地区財団委員会委員長
吉岡義治

第1回の例会 — 1905年2月23日

シカゴの小さな事務所から始まった

ポール・ハリス(弁護士)

ハイラム・ショーレー (洋服生地商)

シルベスター・シール(石炭商)

ガスターバス・ローア (鉱山技師)



初期のロータリー原則



- 初期のロータリーの目的は、
『親睦と相互扶助』ただそれだけでした。
 - ・ 一人一業種⇒互いの警戒心を解き
 - ・ 身内の付き合いをする
 - ・ 原価取引⇐身内同士の取引だから、儲けてはいけないよ。
 - ・ 困った時は助け合う

こうした仕組みの中で、会員たちは互いの背中を掻き合い、
知恵を出し合い会社経営の視野を広げていきました。
まさに、会社経営者が持つべき資質そのものでした。

初期のロータリー原則



この頃のロータリーには、
「世のため・人のため」
などという考えは一切ありません。

だからこそ、喧嘩もありませんでした。

転機：ドナルド・カーターの言葉

しかし、ある人物の言葉がロータリーを大きく変えます。

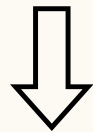
特許弁理士、ドナルド・カーターです。

彼は入会を勧められた際、こう言いました。

「断る。おまえたちだけ定期的に集まって、仲良しになり、
商売が繁盛する。自分たちだけ良ければそれでいいのか。

おまえたちが繁盛するということは、他の人たちは繁盛しないということ
ではないか。物事はバランスが取れていなければいけない。

ロータリアンが儲かるなら、ロータリアンと同じくらい、他の人たちも恩恵を
受けられるようでない「ロータリー運動」は、やがて潰れる運命だ。
人の尊敬と信頼を受けない団体は長続きしない。そんなクラブに入る必要はない」



この言葉にポールは深く反省します。

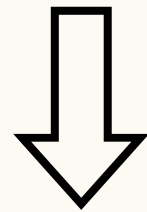


ドナルド・カーター
特許 弁理士



人の尊敬と信頼

クラブの仲間たち



世の中の人々

ポール・ハリスは自薦で会長に

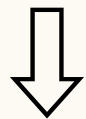
1907年、意を決し、ポールは自らロータリーの会長になります。

目的は「世のため・人のため」の「奉仕」をロータリーに取り込むためです。

人が「理想」を追い求めることは悪いことではありません。

だけど「理想」がみんな共通に願っているものであればあるほど、

その「理想」を実現する方法で対立が起き、実現する手段で争いが起きます。



その最たるものが夫婦喧嘩です
よね？

親睦から奉仕へ・・・

ここからロータリーは、

「親睦」から「奉仕」へと舵を切り始めます。

「親睦」の意味が「フレンドシップ」から

「フェローシップ」に変わっていくのです。

親睦から奉仕へ・・・

元々、ロータリーは「横の平等な並びだが、多業種の集まり」
つまり「平等だが異質」の集まりです。



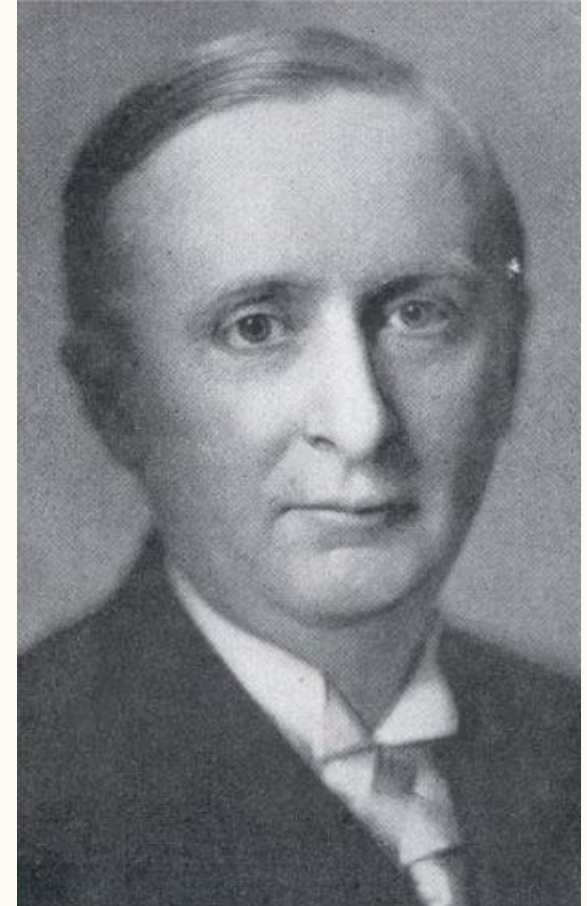
「お互い握手をする関係」から「一本の旗を皆の手で支える関係」へ

ポールは「自分たちのためだけに集まるのは過去のロータリアンです。
これからは、世のため・人のために」とやったもんだから大変です。

みんなは「ポールはあんなことを言うために会長になったのか。
一番最初の会合で俺たちは寂しかった。定期的に会合をして、
仲良しになったら楽しいだろうと言ったのはポールじゃないか。
「世のため・人のため」なんて、
どこから持ってきたんだ」とあきれました。

なにもする事なく1年が過ぎ、ポールは次年度も会長を志願しました。
しかしポールは創設者なので、誰も止められません。

そんな時、1908年、
フレデリック・シェルドン
が入会します。
彼は販売業の専門家で、
商取引の本質を
こう説きました。



シェルドンの奉仕理念の確立

商取引の本質をこう説きました。

* 商取引は、「売り手」と「買い手」の両方が満足しないといけません。

* 商売を成立させるには「売り手と買い手」の間に「信用」という「信頼関係」が必ず要ります。

* この「信用」をつくるための努力と経験を通して生まれる

【高い意識の持ち方・心のあり方】があつてこそ、安定した利潤を上げることができます。

* このことが【相手の身になって考える奉仕概念】と一致します。

儲けるためには「誰からも後ろ指をさされないよう、身も心も不正を戒め、ルールをきちんと守る」という【社会道徳】が必要です。

標語の確立：1911年

この考えをロータリーに応用し、

『利己と利他の調和』

自分の利益と他人の利益とを調和させるという
「奉仕概念」を打ち出しました。

そして1911年、標語が生まれました。

OFFICIAL MOTTO

標語の確立：1911年

“He profits most who serves best”

最もよく奉仕する者、最も多く報いられる



CORE PHILOSOPHY

理念の確立：超我の奉仕

1923 ADOPTED

SERVICE ABOVE SELF

超我の奉仕



ロータリーは人生哲学です

元々は「Service、not self」（自己滅却）
「私利私欲を捨てなければ奉仕ではない」でしたが、

ロータリーは宗教ではなく、良き職業人が自己研鑽（自分の能力・知識を向上させるために努力し、磨きをかけること）を重ね、

利己と利他（自分の利益と他人の利益）を調和させ、どのように生きていくべきかを説く人生哲学です。

まずは「自分の利益（自己）」があり、それを導く理念（基本方針）としてサービス「奉仕」があります。



ロータリークラブ連合会の設立

しかし、ポールの描いたロータリーの将来像は、シカゴクラブの
現実とは大きくかけ離れた次元まで飛躍していきました。

その結果ポールは「親睦と物質的相互扶助」に満足しきって、何とかその域に
留まろうとすりシカゴクラブの会員の意識改革を気長に待つのを断念し、
「会員増強・積極的拡大・奉仕理念の確立」という、彼の革命的試みを支援する
仲間と、新しい組織をつくる道を選ばざるを得なくなりました。

1910年、当時16クラブまで拡大していたクラブ連合体で、全米ロータリークラブ
連合会を結成しました。

これを境に「奉仕・拡大派の活動の場」はシカゴクラブから全米ロータリークラブ
連合会へと移ります。

そしてその後、国際ロータリー連合会さらにRIを中心に「ロータリー思想の追求」
が行われることになっていきます。

この苦い経験を経て「親睦の場としてのロータリークラブ」
と無用な混乱を避ける配慮から、

「奉仕理念を追求し積極的に拡大を図る場としての連合会」
の構想が生まれた訳です。

参照「ロータリー歴史探訪」 田中毅著



身体障がい者への支援とロータリーの実践

ロータリーの奉仕が社会に広がった象徴的な出来事があります。
あるロータリアンが、車いすの少年が学校に行けずにいる姿を見て、
「この子の人生にとって最大のマイナスだ。ロータリーで何とかしよう」
とクラブに提案し、養護学校を設立しました。
このあるロータリアンとは、後の国際連合会会長のマルホランドでした。
また、息子を事故で亡くしたエドガー・アレンは、
「息子の生まれ変わりだと思って」
と身体障がい者の教育に生涯を捧げ、全国運動へと発展させました。
こうした実践が、
「ロータリーは世のために働く団体だ」という社会的評価を高めていきました。

ロータリークラブの財源でどこまでやるのか

【奉仕活動の実践】を巡る論争です。

『ロータリーの活動の主流は、職業奉仕の理念に基づく活動である』
と主張する派と

『世の中に不幸な人がいる限り、それを救済するのが先決だ』
という社会奉仕活動に重点を置く派

との論争です。

1923年、セントルイスの大会で「決議第34号」が発表されるまで大会は紛糾し、「ロータリー分裂の危機」たる大論争になりました。

争うくらいなら、いっそのこと分かれてしまう方が簡単ですが、ロータリーは『横並びで多業種の集まり』つまり『平等だが異質の集まり』です。

「一人ひとりが自分を磨くために、異質のものを組み合わせる」これが【ロータリー運動】です。

異質であればあるほど、自己研鑽のきっかけとなり、自分が磨かれる度合いが強くなります。分かれることは、自己研鑽のチャンスを捨てることになります。

決議第34号

ロータリー思想とは何ぞや。

どういうふうに奉仕の実践をするのか

明記したものが、コミュニティーサービスに関する決議第34号です

決議第34号第 3 項

第3項「実践」はクラブ組織とは関係なく、
一人ひとりのロータリアンがするものです。 とあります。

自分ひとりで何ができるのかと思う人がいるかもしれません。
そのグループで「ロータリーの考え」をもって、お金が足りなければ
自治体に働きかけるのもよいでしょう。

また、クラブ財源の許す範囲内で、クラブで企画立案もできます。
「クラブに30人のロータリアンがいれば、30通りの実践がある」

決議第34号第4項

第4項に「ロータリーは理論と実践の調和の中に宿る」とあります。
理論も大事ですが、実践も大事です。

「実践」という行動は「理論」があって、その移した影です。
調和しないとはいけません。

この規定を書き込んだのは、1914年国際連合会会長、
マルホランドでした。

決議第34号第5項

「各クラブの自治権と国際ロータリーの
自治権はどう関わり合いを持つのか」

実践に関してはクラブに絶対的な自主独立性があります。

『クラブが実践をやるとは、クラブがロータリアンを
育てるということです』

そしてロータリアンはクラブではないところで奉仕をやります。

クラブが乏しい財源を使ってやるのは

「任意の一例をとらえて会員を教育するためにやるものだ」
ということです。（つまりはサンプルのようなものです）

国際ロータリーの役割は

「実践においては、アイデアの提供」です。

情報媒介で、それを活用するかどうかはクラブの自由です。

しかし、謙虚に学びたいものです。

決議第34号第6項

「団体的に、金銭的に、奉仕活動はどんな「枠組み」で行われたら ロータリーになるのか？」

この3項に、「すでに専門事業団体がある場合は、例えば老人問題での老人ホーム、母子問題での母子寮など、関係機関がある場合は、自ら手掛けるのではなく、側面から援助する方法を勧めます。それがない時はじめて事業団体を組織してもよい」とあります。

4 項に、管理においては「設立したらロータリアンは手を引く」ただし、指導者個人が理事長として残るのは差し支えない。

ロータリーの一義は個人奉仕です。

決議第23 - 34号における声明は

ロータリーに

「個人の利己心（我欲）と他者への奉仕という矛盾を和らげる
実践哲学」を確立させました。

以降、ロータリーは単なる理論の研鑽から

「入りて学び、出でて奉仕せよ」

という実践の時代へと大きく流れを変えていきます。

理念の追求と社会での奉仕活動（実践）の路線対立を解消し、
両輪として進める基盤となりました。

ご清聴ありがとうございました

第2740地区財団委員会委員長
吉岡義治

参考文献

- ・ GOLDEN STRAND 黄金の絆 Oren Arnold著 田中毅訳
- ・ シェルドンの森を巡る旅 田中毅著
- ・ 奉仕の原則と保全の法則 田中毅訳 アーサー・フェレデリック・シェルドン著
- ・ ロータリー歴史探訪 田中毅著
- ・ 来し方行く末 塚原房樹著
- ・ ロータリーの心と原点 廣畑富雄著
- ・ ガイ・ガンデッカーから学ぶロータリー 鈴木一作著
- ・ 米山梅吉翁と信託のすゝめ 財団法人米山梅吉記念館